

二〇世紀末におけるヒポクラテス医学と哲学

国立アテネ大学医学部医史学教室主任教授
国際ヒポクラテス財団理事長

スヒロス・マルケトス

訳・深 瀬 泰 旦

本論は一九九三年四月一七日、熱海MOA美術館においておこなわれた当学会と、財団法人MOA健康科学センター共催の「ヒポクラテスと伝統医学と現代医学」講演会における特別記念講演である。

ヒポクラテスが天才であることは、多くの歴史家たちによつて分析されているので、私が力説すべきことはあまり残されていない。熟慮の末に、偉大な東地中海文明の医学についてごく簡単に触れ、ついでわずかなヒポクラテスの予言的な言葉をもとにヒポクラテスについて述べるのが最良の方法であろうと決心した。このように対比することによつて、二〇世紀末におけるヒポクラテスと彼の貢献を充分にあきらかにすることができると考えるものである。というのはヒポクラテスは医学の天才にとどまらず、歴史上世界に輝きわたる光彩を放った人物の一人であるからである。このような理由で、彼の偉大な人物像については後世の人びとによつて研究されていたし、現在も研究されているが、同時

代の人びとによつて十分に研究されてはいなかった。われわれがホメロス、ピタゴラス、ソクラテスやその他、多くの科学史や文明史上の不滅の人物について、じかの知識をほとんどもつていないのは偶然のことではない。

有史以前に原始人が病を癒し、苦しみを和らげるために試みたことは、本能と経験にもとづいていた。原始人は試行錯誤をかさねて、医学的価値をもつた自然物や自生植物を発見したようである。民俗療法、あるいは経験療法、魔術的療法、家庭療法はこのような流儀に起源をもつており、原始人の医学においてある役割を演じていたが、それはごく一部にすぎなかった。当時の人びとは死や疾病を自然現象だとは考えなかった。重要な疾患や、障害をのこすような疾病は、超自然的に起るもの——悪意をもつた悪魔や怒れる神の仕業——と考えられた。有史以前の人びとの医学において、魔術や宗教が大きな役割を演じており、魔術的宗教的な医学が、勝利にかがやくヒポクラテス科学に先行する歩みであり、西洋の合理的医学発展のための導入部であつたというのは驚くにあたらない。

その長い歴史的發展において、医学の進歩は政治的に、社会経済的に、科学的に、技術的に、文化的に、総体として常に社会の發展段階に依存している。医学においていかなる進歩がみられたかを理解するために、われわれは人間社会の發展との関連で医学の歴史を研究すべきである。ここでいくつかの疑問が生ずるにちがいない。哲学や科学における理論、合理主義と経験主義、決定論と非決定論、自然の法則、あるいは神の律法は、ある時期における發展の必要性をおおいかくすためにつくり出されたものだろうか？ 医学的発見における偶然的役割とは何だろうか？ 天才——自然のささやきに耳を傾けようとする科学的な心をいつも準備している——の役割はいかに重要であるか？ 想像力とアイデアを系統立てる能力によつて、臨床的な観察、科学的な理論、医学上の教理、診断上の発見と治療上の考察をおこなひ、医学上の進歩をうながす指導者とは誰だろうか？

I ヒポクラテス以前の医学（あるいはホメロス医学）

古代ギリシア医学は多くのより古い源泉からその知識を得ている。医学はクレタ島のミノア文明（紀元前二〇〇〇年）の中で高いレベルに到達したのかもしれない。ギリシア人はその地理的な位置のために、エジプト、バビロニア、メソポタミア、フェニキアなど種々の文明の影響をうけている。

ヒポクラテス以前の医学は、ギリシア神話や医術の神アスクレピオスの神殿と関連をもっている。アスクレピオスは健康と医術をつかさどる大家族の家長である。彼の妻エピオネーは痛みをやわらげ、娘のパナケイアはあらゆるものに癒しをあたえた。もう一人の娘ヒギエイアはその治療分野は公衆衛生と疾病の予防であり、神殿にへびを飼っていた。テレスポ罗斯は疾病の回復期の世話を受け持ち、ポダレイリオスは外科の軍医で精神科医でもあった。そして最後のマカオンは外科医で、ホメロスが『イリアッド』の有名な一行の中で彼についてのべている（イリアッドXI・五一四）。「医師とはひとりで何人分もの価値をもつ男である」と。つまりホメロスの詩を自由に解釈すれば「傷を癒すことの上手な一人の賢い医師は、公共の福利に寄与する複数の軍隊にまさる」。

以下のことを強調したい。

- (a) ホメロス医学はいく分魔性をもっているが、魔術的ではない。
- (b) ヨーロッパの言語による最高の叙事詩『イリアッド』には一四〇の創傷と負傷についてのリアルな記述がある。

II ヒポクラテス医学派

ギリシア医学の神話時代に続くのは、長期にわたる聖職者医師の時代であった。アスクレピオスは数おおくの後継者アスクレピアデスをのこし、かれらがアスクレピオスの仕事をつづけた。かれらの活動は主に精神的治療の特質をもつ

ており、地中海各所の、海の近くや泉の近くにある健康センターで医療をおこなった。

聖職者医学とともに、ある種の世俗的医学もまた進歩し、自然主義哲学者——しばしば「フイジオロギスト」とよばれている——の影響のもとに、医学は次第に宗教的色彩を失っていった。ギリシアの哲学者たちが世界についての超自然的な説明に疑問を抱きはじめ、論理にもとづく一群の知識を創造しはじめたのは、紀元前六〇〇〜四〇〇年のことである。その結果、小アジアのイオニア学派のアスクレピオス医学、マグナ・グレシア（現在の南イタリア）のクロトンのピタゴラス学派、クニドスとコスの医学派と経験主義などが、ヒポクラテス時代の先駆者である。

コス島の学派と対岸のクニドス半島のそれとの主な相違点は、クニドス学派が疾病についての静的で些細な事柄に特別な重要性をみとめるのに反して、コス学派は疾病の自然の経過と予後をおおいに強調するにあった。コス島は最高の医学の知的中心地であった。

ヒポクラテスとかれの学派は、最初に合理的、科学的な体系をつくりだした。そのために医学は古代ギリシアに源を発している、といわれているのである。しかしこれはある部分でしか正しくない。魔術から科学への医学の変遷は、数世紀にわたってつづいていくゆっくりとした経過であり、古代ギリシアはバビロン、エジプトその他の文明からおおくのものを受け継いでいる。

ヒポクラテスは観察の力と論理的な推論をとりあげた。彼は疾病を自然主義者の眼でながめ、患者をその環境の中において研究し、厳格な医学的な検査方法を発展させた。ヒポクラテスの誓詞は論理的な掟であり、理想的な掟であつて、これは二千年以上にわたって医療の指針となつてゐる。

ここで以下のことを指摘したい。

(a) ギリシア人は地中海文明の見解と文化から、おおくのものを吸収した。

(b) ヒポクラテス以前の哲学者医師たちは、ホメロスの時代の医学とヒポクラテス医学をむすぶ懸け橋である。

(c) ヒポクラテス全集は魔術や超自然的なものに束縛されていない。

III ヒポクラテスの診断と予後の重要性

ヒポクラテス医学は、職業人としての行為について高い水準を維持することが必要であること、また医学においては症状を観察し、疾病の身体的症状を記録するにあたって、より厳密な正確さが必要であることを強調している。医師たちははじめ、疾病の肉体的原因を発見しようと努力する自信をつよめた。これこそ、疾病を超自然的な説明によらず、自然に説明できる現象とみていたという、ヒポクラテス医学にみられるもつとも重要な事実なのである。

ヒポクラテスは医師を聖職者ではなく科学者とみなしたし、疾病を超自然的現象ではなく、自然の経過であるとみた。科学の法則にしたがって医療をおこない、自らが職業上の倫理的・道徳的指針にしばられるべきことを自覚していた。

ヒポクラテスは解剖学、あるいは生理学についてはほとんどしらなかった。臨床用の体温計も聴診器ももっていない。患者の胸に耳をあてた聴診法を採用し、たとえば胸膜の摩擦音——革のきしむ音になぞらえた——を記述した。科学的な器械をもつてはいなかったが、科学的な方法は身につけていた。かれの記述にはしっかりと観察と論理的な理論にあふれている。たとえば疾病の経過は患者の環境や生活様式によってある程度まで決定されている、ということヒポクラテスは知っていた。さらに「不調和な」器官は身体全体をくるわす、ということも知っていた。さらにつづけていう。「眼を治療するためにさえ、頭を治療しなければならぬし、身体全体さえも治療しなければならない」。疾病の重要な症状や時期をも観察していた。その瞬間に医師が何を予期しなければならぬか、何をしなければならぬかを知るための規範を確立した。

「自然の治癒力」を信ずるために、ヒポクラテスは、医師が疾病の経過とおこりうる結果についてしなくてはならぬことを強調している。疾病の正確な状況をしるために、かれは患者の尿を検査し、肺に耳をかたむけ、呼吸をチェッ

クし、その他外表の色調や徴候を調べた。

ヒポクラテスのもつとも重要な、予言的な著作の一つに、『予後』という標題がふざけているのは興味深い。「医師が予測をもって医療をおこなうことはすばらしいことだ、と私は思っている。もし現在の症状から将来おこりうる事象をあらかじめ知ることができれば、医師は最高の治療をおこなうことができるだろう」。

ヒポクラテスの意見によれば、最高の医師とは「予測ができる人間である。換言すれば患者の過去・現在・将来を予言し、あらかじめ手をうつことができるものである」。

IV ヒポクラテスの治療法

全般的な治療法、あるいはヒポクラテスの合法的な治療法は、患者の環境を適正にし、栄養を増進させ——換言すれば肉体的な力をたかめる——、精神力を高揚することにある。これは正確な診断と治療に基礎をおいている。

(a) ヒポクラテス派の医師は、患者をその環境の中で考え、できうるかぎりその環境を適正なものにしようと努力する。食習慣を正しくすることはきわめて重要である。衛生上のほんのすこしの誤りでさえ、もつとも治療の難しい慢性疾患の発症におおきな役割を演じていることが、かならずしも理解されていない。かれの治療上のおおきな成功は、患者の衛生状態を注意深くしらべて、細かいところまで鋭い注意をむけたという事実にもとづいている。

(b) 患者の肉体的な力を増進させるための物質代謝にもとづく治療法として、ヒポクラテス派の医師は食事療法、身体的療法、薬剤をもちいた。食事療法と身体的療法はもつとも重要である。ヒポクラテスにとって“diet”という言葉は食事と運動療法の両方を意味することをわれわれは想起しなければならない。肉体的医学の偉大な発展によって、合法的な治療法のうちのこの部分が重要であることがあきらかになつた。

(c) 「患者に利益がある、すなわち患者を傷つけない」という概念を信じていたので、ヒポクラテスの薬物はその数

はおおくないし、複雑でもない。しかし、それらの中には非常に有効なものがいくつもあり、それらを適切な時期に、思慮深く使用することによつて——かれの“*primum non nocere*”（害をあたえないのが最高）の原則にしたがつて——おおくの患者の命がすくわれた。

ヒポクラテス全集では、医師はあらゆるタイプの患者を診察しており、器械の使用を要求したからといって、その患者に最善をつくすことをこぼんではない。このように医師とは専門医ではなかった。しかし大かたの医療は、患者に器械を使った治療をおこなわないことにあつた。外科的手段をもちいてはいけない患者には、ヒポクラテス派の医師は「自然療法」とよばれているものを採用している。これに関連したヒポクラテスの箴言では、次のように述べられている。「薬物で治療できないものはメスで、メスでだめなら焼きごてで、焼きごてで治せないものは治療不可能と考えるべきである。」

(d) 局所の病巣は心理的・神経的・内分泌的平衡の乱れに関連がある。ヒポクラテスの用語法によれば、この平衡による結果として体液の修正がもたらされる。これはわれわれが知っている生物学から、容易に推論することができる。有機体は心理的・神経的・内分泌の体系によつて、自らを環境に適応させる。疾病とは変化した環境への適応のあがきであり、だから最初の症状は心理的・神経的・内分泌的なものであるにちがいない。すなわち体質的なものであり、代謝性のものであり、ヒポクラテスの理論による「体液的」なものである。これは細胞、組織、器官の局所的な現れであるかもしれないが、厳密に言えば決して局所的なものではない。局所の異常が出現したときでも、それらは局所的な疾患ではなく、精神と肉体をひつくるめた身体に、それ以前に発症した全身性の障害なのである。

V ヒポクラテスの倫理学

“ethics”という言葉は、ギリシア語の“ethos”（よい性格）という言葉から派生した。倫理学は何をなすべきかの科学で

ある。それゆえ行動の規範はある一つの職業にとつてかくべからざるものと考えられており、歴史的にみても尊敬と信望を高めることが目論まれている。これはたしかに、ヒポクラテスがつくつたとされる誓詞がかかれた時期の話である。医学の専門職は高潔な態度を維持しようと苦心したが、宗教・法律・哲学などと同様の尊敬をあらわれないなかつた。

倫理的な行為は医師の主要な特質であるとヒポクラテスは考えた。かれの倫理学的概念は、五部の書物——『医師について』『誓詞』『法』『品位について』『箴言』——の中に述べられている。それらの書物で、医学においては倫理的な態度が必要であることを追究しており、医療にはおおくの困難——すなわち自己抑制の必要性、自らの教師に対する尊敬、患者に対する加療、義務に対する献身、誠実と謙遜、着実性、沈着、同僚と平等の権利をもとうとする精神、富への無関心、次の世代の医師の教育への委託、倫理的法則に対する敬意と親密——が本来つきものであることを強調している。

西方世界においては医学の専門職はヒポクラテスの誓詞と関連している。ヒポクラテスの誓詞は医師にとつて倫理的志向の象徴であり、医師という専門職業人としての生活に必要なものである。患者も医師も同じ様に、誓詞とは医師を倫理的に束縛するもの、患者に対する義務を要求するものと考えている。

ヒポクラテスの誓詞は、医学倫理に關係するすべての国際的な医学宣言に関連した問題点を有していると考えられている。これはヒポクラテスの名前に関連した、もつともひろく知られている文書である。一ページの倫理規範(文書)ではあるが、それについては世界中で数千ページにおよぶ論文がかかかれている。それは時代をこえた、医学専門職の義務論のお手本である。しかし二〇世紀末になつて、ヒポクラテスの誓詞は批判をうけている。バイオテクノロジー、コストの高騰、医学的社会的形態の変化などによつて提起された主要な倫理問題によつて、新しくみとめられた問題に関連して、知識のどのような源泉が役に立つものであるかをしっかりと眺めるのによい機会があたえられた。その一つの典型

的な実例として、エイズについての私的な、公的な難問題がある。エイズとたたかうためには人間の権利の基本的原則を一層強調しなければならぬし、現在の医学知識と社会条件とを考慮して、公衆衛生活動を考えなおさなければならぬ。

次のことを強調したい。

1、ヒポクラテスの誓詞は、(a) 妊娠中絶、(b) 去勢術、(c) 安楽死、(d) 結石患者の手術、(e) 職業上の秘密の漏洩、に反対している。

2、おおくの医学倫理は、ヒポクラテスの倫理則や道徳律から派生したものである。

3、ヒポクラテスの誓詞は専門家はともかく、学生や若い医師によつてのみうけいられるべきである。

4、ヒポクラテスの誓詞には、次のような時代をこえた不滅の成句がみられる。「私はわが生活と医術を純粹に、そして神聖に保つつもりである。」

VI ヒポクラテスの哲学

二〇世紀末において、ヒポクラテスの哲学が過小評価されているのは不幸なことである。医学も哲学も一つの学問分野としての医学哲学の発展から利益をえている。たとえば医学哲学はバイオエシックスにとつてかくべからざる基礎である。医学哲学は解釈や理論的發展の本質といったような科学哲学の鍵となるいくつかの問題に鋭い洞察をくわえ、医学や健康科学における実験や研究において、有益な方法と同時にその目標を設定するのに役立つ。

不本意だと思ふときは、不適切な言葉の誤解によることがおおい。われわれは哲学と形而上学的推論とを同一視がちであるので、「医学哲学」という慣用語に反撥を感じる。ギリシア語の術語において、哲学とは科学上究極の真理である知識を総合したものであり、ギリシヤ人の中では医師としての資質と哲学者としての資質をかねそなえることは、人

間を神のレベルまでひきあげることである、ということをわれわれは忘れてゐる。われわれは“doctrine”(学説)という言葉に反撥を感じる。その言葉が“doctor”すなわち教えるという行為から派生したものであり、根本的な科学的真理を意味するにもかかわらず、しばしば事実の裏付けのない所説を意味するようになったからである。本来ギリシア語の概念で理論とは真理全体を直観したものであるのに、われわれはそれを指導的仮説だと解釈しているのだから、“theory”(理論)という言葉を拒否する。

医学上の学説すなわち一般的な医学理論は、医学知識を統合したものをさしている。しかし、その一群の知識は成長し変化しており、常に成長し変化してきた。偉大な医師の研究や医療の中に具体化された学説を解明し、それを知的な形であきらかにすることが、文化的観点からみて医学を研究するものの目的である。

ヒポクラテスの哲学は、小アジアにあるイオニアの哲学者の概念と、類似性のない要素と対立する性質との平衡についてのピタゴラスやアルクメオンの理論とを結合させて、それによって人間生理学や病態生理学のための体液説を確立した。この理論によると、人間は精神と肉体からできており、四つの体液——血液・粘液・黒胆汁・黄胆汁——をもっている。これらの体液はたえず運動をつづけ循環しているが、ヒポクラテスはそれについて解剖学的な理解をもつていなかった。これらの体液の平衡が保たれているとき(eucrasia)は健康であるとみなされる一方、平衡が破れる(dyscrasia)と病気になる。体液の運動が肉体と精神の統一を確保しているので、肉体のある部分のごくわずかな異常も全体に反映する。それゆえに健康とは体液の調和のとれた混合状態であり(eucrasia)、同じ論理にもとづいて疾病とは体液の不完全な混合状態(dyscrasia)である、とまとめられている。だからヒポクラテスが局所的な病巣よりも、身体全体について関心をもっていたということはあきらかなことである。四体液のうち一つが過剰になると、結果としていろいろな要素(血液・粘液・黒胆汁・黄胆汁)、気質(多血質・粘液質・胆汁質・憂鬱質)、器官(心・脳・肝・脾)、季節(春・夏・秋・冬)が生ずる、ともヒポクラテスはのべている。

体液説は健康と疾病について、同時代の人びとが考えていることと一致している。医学は独立した、因果関係の体系——時間と空間の中にあり、因果律と結果の法則に関係をもつ要素から成りたつて——に基礎をおかなければならない、といわれるようになったのはそれから間もなくのことであつた。一方患者は判断できる疾病の身体的症状には気づくが、心理的な、精神的な経験は主観的なものであり、身体的な法則にしばられることはない。しかし、二〇世紀に革命的な発展をとげた純粋生物学的な考え方は、付随的な徴候としての心理的要因ばかりでなく、原因としての心理的要因をも無視する方向に向かつている。

精神身体医学の概念(プラトンによつてはじめて提唱された)によつて肉づけされたヒポクラテスの体液説は、今日ひろく承認されている「全人的」医学の基礎である。このわく組みによつて、医学の科学的側面が現代風に統合され、有機体が肉体と精神の全体として機能する統一体であることが確認された。「人は肉体と精神の統一体である」、また「精神によつて、よき肉体も、あしき肉体も生ずる」。これは西洋哲学史上最高の輝かしい人物の一人であるアテネの偉大な哲学者プラトンの教えに似ている。「全体としての自然を学ばずして、人体の本性について学ぶことはできない」というかれの信念には深淵な意味がある。すなわちこれはソクラテスの弟子であるプラトンが「ヒポクラテスの信奉者であり、かれの教義はヒポクラテスからえている」ことをしめしている。

ヒポクラテス以後のギリシアの最も偉大な医師と考えられているガレノスによれば、「ヒポクラテスとプラトンの哲学的見解は同じである」。ヒポクラテス哲学の価値は、ガレノスの言葉によれば次のように要約しうる。「最高の医師はまた同時に哲学者でもある」と。

近年、しばしばいわれる言葉である生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)は、全人的医学というヒポクラテス医学に基礎をおいている。浜松医科大学の永田勝太郎教授は、「精神身体医学——西洋医学と東洋医学を統合するもの」というすばらしい論文の中で、生活様式にもとづく疾病が増加しているので、全人的医学が今日ではそれ以前の時代以上に要求

されていることを正しく指摘している。

ヒポクラテス哲学とその予言的な言葉を過小評価することから、二つの重要な社会的な疑問が生ずる。

(a) 医学知識の中で見失ってしまった知恵とはどこにあるのか？

(b) 科学的情報の中で見失ってしまった知識とはどこにあるのか？

VII 結 語

医学教育において、医史学への関心はほとんどしめされていない。

医学の専門家は医史学にほとんど興味をもっていない。

それでも現代の医学はヒポクラテスの哲学と医学からのお学ぶことがある。

ヒポクラテス医学は今なお現代的であり、予言的である。統合的であり、廣大無辺であり、本質的であり、全人的であり、人間的であり、芸術的である。そして適切な医学的治療によって、広範囲にわたる自然の自己治癒力に助力の手をさしのべている。くわうるにヒポクラテス全集は、医学・哲学・科学を全般的に詳細に説いているばかりでなく、歴史にとっても標準的な文献となっている。

医学の歴史は趣味として、あるいは独立した特別な分野としてあつかわれるばかりでなく、毎日の診療に密接に関係をもった生きた科学であり、そうあるべきである。いふなれば、診療にあたる医師は歴史上の治療の事実から、いかにおおくのことを学び、それを利用するかを研究しつづければならない。これらはすべて理論的な面のみならず、医学教育や医療においても考えられなければならない。というのは、医学の哲学ばかりでなく、医学とその治療効果について哲学的に思索するのをもっとも重要なことだからである。

二千五百年後においても、ヒポクラテスの言葉の価値は、医学ばかりでなく、生態学的環境や大気汚染に関連した分

野においてもきわめて重要であり、なお今日的である。また「薬物で治療できないものはメスで」というかれの言葉は、冠状動脈などの治療における現代外科学にとっても予言的価値をもっている。さらに「予言医学」(predictive medicine)にたいする今日的な傾向は、かれの著作『予言について』において、また死にのぞんでいる患者や、予言的診断をくだした患者を例にひいて、十分な説明がくわえられている。すなわち「この人は死ぬことはないが、盲目になるであろう」と。

ヒポクラテスの第一の箴言は、医学哲学の真髄をふくんでいる。

「生命はみじかく、技術は長い。時は一瞬にすぎさり、治療はあてにならないし、判断はむずかしい。必要な治療をあたえるばかりでなく、患者自身やその周囲のものにとっても、また周囲の事情についても配慮をすることが、医師にとつて必要なことである。」

結論として、ヒポクラテス医学や哲学の発展は、

- (a) 科学的な医学の最初の創造的時代の象徴である。
- (b) 西欧文明の歴史を要約している。
- (c) 医学の歴史は医学そのものであることを強調している。
- (d) 医学それ自身が文明の一側面であることをしめしている。

スヒロス・マルケトス教授特別記念講演について

日本医史学会／(勸MOA健康科学センター主催、駐日ギリシア大使館後援で、平成五年四月十七日、熱海市のMOA美術館能楽堂でスヒロス・マルケトス教授の特別記念講演が行われた。

ギリシア・アテネ大学医学部教授であり、またギリシア・ヒポクラテス財団理事長のマルケトス教授の演題は、「現在に息づくヒポクラテス医療とその予言的な役割について」であり、豊富なスライドと氏の深遠なるヒポクラテス医学・哲学の学識に裏付けされた講演は、簡潔でわかりやすいものであった。詳細については、本誌巻頭に特別寄稿として掲載されている講演論文（深瀬泰且訳 標題が変更されて四六三ページに掲載）を参照されたい。

特別講演に引き続き、川合光道氏司会でパネルディスカッション「ヒポクラテスと伝統医学と現代医学」が行われた。リストは石渡隆司（岩手医科大学教授）／岡部治弥（北里大学名誉教授）／永田勝太郎（浜松医科大学教授）／酒井シツ（順天堂大学教授）の四名であった（敬称略）。

会場には一二〇〜三〇名の聴衆が集まり、終演予定時間をこえる熱気にあふれる講演会となった。